

***東京天文台が登場する本―藤村のパリ―**

アーカイブ室新聞第465号に「元東京天文台長事務取扱であった福見尚文氏の名刺発見」(2011年4月13日)という記事を書いた。この記事をご覧になった方からご連絡をいただいた。その方は、福見尚文氏の姪御さんの娘さんということである。

彼女から、福見尚文氏に関する情報と、氏が登場する「本」の紹介があった。彼女によると、「福見尚文氏は母の伯父で、明治18年生まれ。東大理学部で天文学を専攻した後、明治43年(1910年)渡仏、ソルボンヌ大学においてポワンカレー、ヴェシイオ、ピカール、ダルブー、キシャル、ボレル等から純力学、微分方程式論、幾何学、函数論を学び、コレージュ・ド・フランスにおいてアンベル、アダマルについて数学の研究をしたと聞いている。大正10年(1921年)に帰国し、東大助教授に任じられると同時に三鷹の天文台に勤務したそうです。その時期に母が避暑に良く遊びに行ったという話を子供の頃良く聞いていた。戦後は、伊勢で神宮暦の制作に協力したとの事です。

私も福見大叔父に関して存じている事があまりないので、今回の記事を見まして驚きと共に大変嬉しく思いました。

少しですが、河盛好蔵著「藤村のパリ」13章にパリ時代の福見尚文の事が出ていますが学問上の事ではありません。」

ということであった。そこで筆者はすぐに新潮社発行、河盛好蔵著「藤村のパリ」を入手した(写真1)。

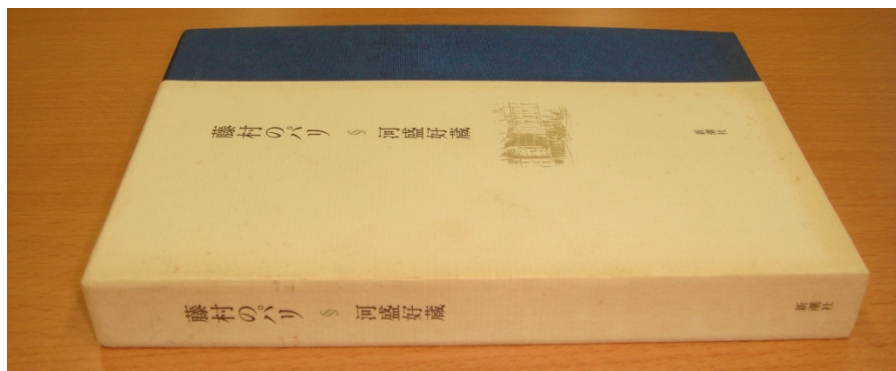


写真1 新潮社刊 「藤村のパリ」

「藤村のパリ」の藤村は島崎藤村である。氏のパリ滞在中のことが記された本である。その13章に、大正12年暮れに、ル・テアトル街のある日本人のアパートに、カルチエ・ラタン方面の画家たち13人が集まって忘年会をした。この13人の美術家仲間が集まったアパートの部屋の持ち主が「福見尚文」であった。その部分を引用すると、
以下引用、

「ところで、十三人の美術家仲間が集まったというアパートの部屋の持主は、福見尚文という当時ソルボンヌに籍を置いていた東大出身の理学士であった。この人は明治18年に生まれ、東大理学部で天文学を専攻したのち、1910年（明治43年）渡仏、ソルボンヌ理学部に学び1921年（大正10年）に帰国、東大助教授に任じられると同時に三鷹の天文台に勤務、定年退官後は郷里松山に隠棲、戦後は伊勢で神宮暦の製作に協力、昭和45年84歳で没した。足掛け12年間の渡仏中、後の画壇の大家たちと親交を結んだ。水原秋桜子著「安井曾太郎」、飛松実著「金山平三」にその消息が伝えられている。

未亡人福見キクさんは現在も御健在で、実は以上の夫君の経歴も未亡人から承ったのである。のみならず未亡人は、愛媛大学環境問題研究会の機関紙「水」第11号（昭和53年春季号）に、「エトランゼエ時代の島崎藤村」という夫君からの聞き書きを発表していられて、短文ながら、なかなか面白い。パリ時代の藤村の側面を知るための貴重な文献であるが、この火傷事件についても次のように書いていられる。（床の上に毛布を敷き、車座になって、手作りの日本料理でたのしい集まりが催されたが、藤田嗣治が得意のギリシャ踊りをし、いきおいあまってストーブのやかんをひっくり返し、藤村と山本鼎が火傷をされた。福見が薬局に連れてゆき、手当をして帰ったら、まだ皆で踊っているのであきれてしまったそうだ。若い画家たちも悪気があったわけではないが、中年すぎた大家然とした藤村をからかって困らせ、面白がっていたのだそうです。）これで見ると、藤田のギリシャ踊りというものが、どのような踊りであったかが推察される。福見自身もこの時29歳であった。

福見キクさんの文章からもう少し引用させて頂くと、（藤村は大そう陰気で無口な、人づき合いのいい人ではなかったので、若い画家たちからは敬遠されていた。山本鼎は文学好きで、藤村とは同郷のよしみもあり、好意的で、「淋しそうだから行って見て上げよう」とさそわれて、たまについて行ったが、床の上に座布団を敷いて、襦袢を着て坐っていた。いろいろ日本のお菓子を出してもてなして下さるのだが、「これはみんな日本の愛読者が、特に女の読者が送ってくれるのです。日本にいるともっと沢山送ってもらえるのですが」と云われた。

福見の先生にダニエル・レヴィという言語学者がいて、日本語や漢文を教えてくれと云われて、時どきお宅に招かれていたが、「いま、島崎藤村という日本で有名な作家がパリにきている」と話したら、「是非会いたいから連れて来てくれ」と云われ、一緒に行った。レヴィが、「現在、日本で一番えらい文学者は誰ですか。」ときき、福見が通訳すると「北村透谷」と答えられた。そんな名前は全然知らぬので、「トーコクとはどんな字を書くのですか」と問い返し、はじめて北村透谷という作家のあることを知った

引用終わり

と、福見尚文のパリでの様子が少しうかがえた。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp